

文化 第78巻 第1・2号 一春・夏一 別刷
平成26年9月24日発行

伝統的価値観の国際比較：
神道的価値観と個人主義・集団主義

大 淵 憲 一

伝統的価値観の国際比較： 神道的価値観と個人主義・集団主義

大 淵 憲 一

1. 序論

我々はこの10年ほど日本の伝統的価値観の研究を行ってきた。その目的のひとつは、現代の日本人の意識と行動を理解することである。日本社会は、近年、社会全体としても個人としても様々の課題に直面しており、その解決策と対処において日本人の価値観が問われることが少なくない。それは、安全保障（国家防衛、国際協調など）、社会保障（年金、保険、介護、雇用とセーフティネットなど）、エネルギーと環境保護（原発再稼働、代替エネルギー、脱エネルギーなど）、経済と雇用（産業構造、雇用・勤務形態、格差と差別化、外国人労働者など）、少子化と女性支援（出産、女性の職業支援など）、それに家族（離婚、育児、青少年、老人など）など多岐にわたる課題である。これらはいずれも日本社会とその中で暮らす人々の生活に大きな影響を与える重要な課題であるが、同時に、人々の間で意見が分かれるものでもある。それ故、これらはしばしばメディアで取り上げられ、社会調査などでもテーマとなってきた。

現代日本人の価値観

こうした問題に対してどのような態度を取るかは、個々人あるいはその集合体である社会が持つ価値観によって影響を受けるであろう。価値観とは、何を良いもの、価値あるものとみなすか、その基準としてはたらく心的尺度である。それはある事象に対する人々の好悪感情や支持・不支持反応を促し、また、彼らが何かを選択をする際には、内的指針としてはたらくものでもある。

日本人の価値観については毎年のように大規模な調査が実施されて、他の

国々との比較も行われている（例えば、高橋，2003；猪口孝・田中明彦・園田茂人・ティムール・ダダバエフ，2007）。そうした調査を見ると、価値観は具体的な選択から抽象的な志向まで階層的な構造を持っていることが窺われる。ある調査では、「道に迷っている人を見かけたら、あなたなら助けますか」といった具体的な選択を尋ねる項目が使用されているが（猪口ほか，2007）、別の調査では「日本の伝統文化は守るべきである」といった高度に抽象的な価値志向を測定する項目が用いられている。これらの価値観には階層性が仮定されており、ある抽象的価値志向がその下にある具体的な選択を導くと考えられる。

日本人の場合、文化心理学者たちは抽象的価値志向の一つとして集団主義があると主張してきたが（Markus & Kitayama, 1991）、これに異論を唱える研究者もいる（高野，2008）。我々自身が行ってきた研究では、少なくとも欧米人よりも日本人は集団主義得点が高いことが見いだされている（Ohbuchi, 2011）。我々は、これを含んではいるが、別の価値志向として伝統的価値観があるのではないかと仮定し、これを測定する尺度を作成した（大淵・川嶋，2009a）。

どこの国も独自の歴史・文化を持ち、その中で独自の価値観が醸造され、世代間で継承されている。日本の場合は、それは仏教、儒教、神道の3つの宗教思想とそこから派生した人間観、世界観、処世訓を含むものと思われる。

日本人の伝統的価値：儒教、仏教、神道

儒教と仏教は中国、朝鮮半島を經由して5世紀頃、相前後して日本に伝えられた。儒教は古代日本においては律令制度など国家体制を構築する際の政治理念として受容され、一方、仏教は精神的充実と救済など個人の内的安寧を求める人々によってその拠り所とされた。神道はそれら外来思想以前から農作業に結びついた自然崇拝的多神教として日本人の間で信仰され、その習俗や慣習に影響を与え続けてきた。儒教、仏教、神道はそれ故、約2000年近くの間、互いに影響し合い、時には混じり合いながらもそれぞれ独自の水脈を保って日本人の思考や行動の仕方、即ち、価値観に影響を与え続けてきた。

現代日本人に見られる精神構造の骨格部分は、外部からの影響が最小限に止められ、内部熟成のための長い時間が確保された江戸期に形成されたと言われている（藤原，2005）。仏教は寺院の国民管理制度化に伴ってその思想や習俗が

全国に普及し、これが共同体の慣習や儀式だけでなく、一般庶民の人間観・世界観に大きな影響を与えた。一方、幕藩体制の思想的擁護のために導入された儒教（特に、朱子学）は、忠孝を軸とする倫理道德を強調するもので、これは武士階級から一般庶民に浸透していった。この面では、寺子屋など民間の教育機関が主要な役割を果たした。明治維新後、中央集権国家の構築を目指した明治政府は、江戸期に社会全体に浸透していた儒教倫理を、天皇制を軸に組み替えるにあたって、神道をその正当化の根拠とした。しかし、神道は明治政府によって国民に新たに押しつけられた思想というわけではなく、本居宣長の国学研究によると、既に江戸期において、日本古来の精神性を継承する社会思想として、人々の間に一定の基盤を形成していたと考えられる（佐藤，2005）。

日本は、太平洋戦争の敗戦によって大きな価値観の転換を経験したが、国際比較研究によると、日本は現在もなお西欧諸国、あるいはまたアジア諸国とも異なる独自の文化を維持している（山口，2003）。それは、共同体の集団主義ともよべるものであり、そこには上で述べた伝統的思想が依然として息づいているように思われる。

これら3つの思想は互いに混じり合いながら日本人の生活と精神に影響を与えてきた。現代の日本社会をみると、人々は年始参りには神社に行き、法事は仏教寺院で行い、入社式では孔子を引用した人生訓が述べられる。現代においてすらこれら3つの思想は儀礼、慣習、処世訓として日本人の生活に定着している。

しかし、精神面の影響はどのようなのだろうか。儒教が親孝行などを強調する倫理思想であることは多くの日本人に知られているが、それ以外にどんな内容の倫理を強調するものであるかはほとんど知られていない。また、仏教や神道になると、寺社にお参りには行くが、それらがどのような世界観や人間観を持つものなのかと聞かれても、ほとんどの人は答えられないであろう。つまり、仏教、儒教、神道の思想内容は、日本人の間で明示的にはほとんど知られていないというのが現実である。それ故、これらの伝統的思想は、現代人にとって、その精神生活にはほとんど影響力を持たない過去の遺物に過ぎない可能性もある。しかし一方で、それらは儀礼、慣習、処世訓などを通して、日本人のものの見方や行動の仕方に非明示的に影響を与えている可能性もある。

伝統的価値観の測定尺度とその特徴

我々はこうした疑問に答えるために、76 項目から成る伝統的価値観尺度「日本の伝統的価値観尺度 (JTVS)」を作成して、現代日本人の価値観を測定し、日本人の様々の心理社会的態度との関連を検討してきた (川嶋・大淵, 2010; Ohbuchi, 2011; 大淵・川嶋, 2009a, 2009b, 2010; 大淵・佐藤・三浦, 2008)。この尺度は儒教、仏教、神道の 3 領域からなり、それぞれの下位尺度は表 1 の通りである。

表 1 日本の伝統的価値観尺度 (JTVS) の領域別下位尺度 (大淵・川嶋, 2009a)

仏教	
輪廻と法力 (11 項目)	宇宙は仏の治める多くの他方世界からなり、生命はそれらの間を輪廻する。生命は仏の慈悲によって生成し、それは草木を含めすべてに及ぶと (本覚思想) いった仏教的世界観。
修身と慈悲 (8 項目)	倫理と精進、慈悲と寛容、煩悩の除去などの仏教的道德観。欲望に負けず自らを慎むこと、感謝と思いやりの気持ちで人に接するなど、人としての正しい生き方を処方。
厭世主義 (6 項目)	人生は苦、諸行無常などの仏教の人生観。人生は苦悩に満ちている、この世は絶え間なく変化するはかないものであるといった仏教的厭世観を反映。
空と超俗 (4 項目)	この世は仮のもので空虚 (諸法無我) といった世界観と、それ故、富や名声など世間的なものに拘泥せず、清らかに生きることを良しとする (煩悩の除去) 仏教的処世訓。
儒教	
忠孝と義務 (11 項目)	長幼の序、公益優先など、社会集団や人間関係の中で個人が果たすべき責任と義務を強調する儒教的処世訓。
天意・天命 (8 項目)	社会の在り方であれ、個人の成功・失敗であれ、すべては人間を越えた天によって運命づけられ決定されている (天命思想) とする儒教的世界観。
恥と世間 (5 項目)	人の目を意識し、世間から非難されないよう行動すべきであるという集団主義的価値観、即ち、節度、集団優先、義務などを強調する儒教的処世訓。
賢君思想 (4 項目)	世の中は優れた資質の指導者によって治められてこそ意味があるという儒教の人間観。

神道

社会的調和 (5 項目)	対立や争いを避け「和をもって尊し」との調和優先的な神道の処世訓。
相対主義 (3 項目)	問題解決には絶対的原理に頼るのではなく、知恵を働かせ状況に応じて柔軟な対応をするのがよいとする神道の処世訓。
集团的功利主義 (3 項目)	ものごとの善悪は共同体に福利をもたらすか災厄をもたらかとの観点から判断されるべきであるとする神道の倫理観。
楽観主義 (2 項目)	世の中は自然に治まるべく治まっていくから、自然の流れに任せるのが一番であるとする神道の世界観に立脚した処世訓。
歴史の内発性 (2 項目)	社会の動きは時勢というものによって決定され、人間の力の及ぶものではない（超人為性）とする神道の世界観。
もののあわれ (4 項目)	女性的で繊細な感受性が日本人の本来の心であるとする神道の人間観

日本人の伝統的価値観に関する実証的知見

これらの伝統的価値観は、いくつかの点で、個人の自由、自律性、発展を最優先する近代的な個人主義・合理主義と相容れない性質を持っている。第1に、これら伝統的価値観では個人の欲望を抑え、他者や集団に尽くすこと、つまり禁欲と献身が強調される。第2に、法力、天、社会と自然の流れなど、人間と社会の運命を司る超個人的力に身を委ねることによって心の平安と諦観を得ようとする姿勢が推奨される。第3に、自己主張を抑えて周囲との調和を測り、また、我欲を脱して自足の心境を願うなど、社会的安定と精神的安寧を尊ぶことが唱われている。要するに、日本の伝統的価値観の本質は、個人の欲望追求を自制し、他者と協調し、また個人を越える何者か（神仏、自然あるいは社会）を信頼して、これに沿って生きることを善しとするものである。

JTVS を使って我々がこれまで行ってきた調査研究から（大淵・川嶋、2009a, b）、現代の日本人がこれらの伝統的価値観をどの程度受け入れているかを見てみると、まず、儒教的価値観の中では、彼らは「忠孝と義務」及び「恥と世間」のふたつの倫理観に対して高い支持を示した。仏教的価値観の中では「修身と慈悲」という倫理観が、また、神道・国学でも「相対主義」という処世訓が高い支持を得た。従って、伝統的思想の中に示される人間の生き方については、現代日本人の間でも広く受け入れられている。これらのうち、儒教の

倫理観は社会や世間など所属集団を強く意識し、集団規範に従い、その繁栄に尽くすという集団主義的志向の強いものである。仏教の倫理観は、自己規制、謙虚、感謝など内面の清らかさを強調し、集団というよりは、一個人としての生き方を示すものである。神道・国学が示す処世訓は、儒教や仏教の倫理観のような厳しさや一貫性はなく、むしろ、融通無碍に物事に対処すべきであるという現実的知恵を強調するものである。このように、伝統的価値観は、現代人の肯定する人間の生き方についてそれぞれ異なる側面を表すものであった。

人間観として比較的高い支持を得たのは神道・国学的価値観の中の「もののあわれ」と仏教的価値観の「厭世主義」であった。これらは一見すると異なる内容のものだが、共通点もあり、それはどちらも生命やこの世を「はかないもの」と見ている点である。「もののあわれ」はそこに感傷を感じる日本人の感性を強調し、感受性豊かな日本人像を肯定的に捉える見方であるが、一方、仏教の「厭世主義」では、人生をはかないものとしてすべてを悲観的に捉え、人生は苦悩に満ちたものという否定的観念が強調されている。両者はいずれも人生の「はかなさ」に注目しながらも、その肯定的な面と否定的な面を表現する価値観である。

この世をどう見るかという世界観も各思想に含まれていたが、儒教の「天意・天命」、仏教の「輪廻と法力」はいずれも支持が低く、現代日本人には余り受け入れられていなかった。一方、神道・国学の世界観「内発性」は比較的支持度が高かった。これら三者はいずれも超越的力の作用を強調するものだが、本研究の結果は、神でも仏でも、あるいは天でもなく、自然というものが日本人にとってはもっとも受け入れやすい超越的観念であることを示唆している。

一般的傾向は、今見たとおりだが、しかし、全ての日本人が伝統的価値観を同じ程度に支持し受容しているわけではないであろう。まず社会的属性の違いだが、全体としてみると、伝統的価値観の主な支持者は低学歴、低収入、低階層、あるいは無職の人だった。その対極にある高学歴、高収入、高階層の人が強く支持する伝統的価値観次元は一つもなかった。このように、伝統的価値観の支持者は比較的恵まれない社会低層の人たちであった。これについてはいくつかの解釈が可能である。第1に、低層者は自尊心が低く、自己を弱く非力な存在と感ずることから、人間関係や所属集団への依存を強め、また、これが超個人的存在を受け入れる心的条件となっている可能性がある。第2に、低層

者は非専門職が多く、職業面で自律よりも協力の機会が多いと考えられる。こうした経験が自己抑制的で他者志向的態度の形成を促し、伝統的価値観への親和性を強めたと思われる。第3に、恵まれない環境に対する不満とそこから生じる修復的認知が伝統的価値観への接近を促す可能性がある。不満は厭世主義に、また、その境遇を運命と思うことは天意天命に、また不満を補償するために所属集団の価値観に注目して集団志向的価値観（忠孝義務、集団的功利主義）を強めるといった可能性がある。第4に、伝統的価値観になじみ、他者志向的で個人主義の弱い人が低学歴になりやすいという逆の因果関係も可能であるが、このことは伝統的価値観が個人的達成や成功を妨げる可能性を持つものであることを示唆しており、更に検討の必要がある。

政党支持は個人がどのような社会を理想とするか、社会理念を反映するものである以上、価値観との関連がみられることが当然予想できる。儒教的価値観は概ね自民党支持者の間で強かった。これは親孝行や目上を敬うといった縦型人間関係、与えられた役割を全うするといった社会的責任などを強調するもので、前近代の日本において美德とされてきた封建的価値観を強調するものである。一方、社民党支持者は仏教と神道・国学的価値観に関して好意的だったが、ここには対立を避け、周囲や自然との調和をはかること、我欲を捨てて精神的安寧を尊ぶといった処世観が含まれている。こうした点からすると、社民党支持者には友好と平和を愛し、経済成長よりもスローライフな行き方に充足感を求める脱近代的価値観志向が見られると言ってよいであろう。共産党支持者は日本の伝統的価値観については全般的に拒否的だった。最後に、民主党支持者は、伝統的価値観に関してはどの尺度でも平均的な位置にあり、これといった特徴が見られなかった。この結果から見る限り、民主党は様々の異なる政治信条や社会理念の持ち主によって支持され、特定の価値観が突出している訳ではないことを示唆している。

本研究の目的

文化研究には etic なアプローチと emic なアプローチがある。後者はどの社会にも共通する普遍的価値観次元があり、各文化の違いは程度の問題であるとみなす立場である。etic なアプローチの代表的研究は Hofstede (1983) のもので、彼は個人主義－集団主義、階層性－平等性、男性性－女性性、不確実性回

避の4次元を見出しており、日本は男性性と不確実性回避が高く、階層性は低く、そしてやや集団主義的と特徴づけられる。更に、Schwartz (1994) は保守主義、感情的自律、知的自律、支配、階層性、平等主義、調和という超文化的価値観の7次元を見いだしており、内容的にはHofstedeのものと重なる次元もある。一方、emicな価値観研究とは、各文化には他の文化と比較できない固有 (indigenous) の価値観があると仮定し、それぞれ独自の概念的枠組みを用いて各文化の価値観を研究しようとするアプローチである。

我々が仏教、儒教、神道の伝統的価値観の研究を始めた際、これを暫定的にemicなアプローチと位置付けた (大淵ほか, 2008)。これまでのJTVSを用いて行った研究を通して、日本人の伝統的価値観の特徴が明らかになってきたが、しかしこれらが日本人だけの特徴であるかどうかは断定できない。そこで、本研究ではJTVSを用いて他の文化の人々と価値観を比較し、これを日本人と比較することを試みる。本研究は、伝統的価値観尺度の3領域のうち神道の価値観に焦点を当てて国際比較を試みる。従って、具体的な目的は、(1) 神道から派生した日本の伝統的価値観が他の文化圏の人たちに見られるかどうかを検討し、(2) この点から見た日本人の価値観上の特徴が何かを他文化の人たちとの比較を通して明らかにすることである。

2. 方法

調査対象者と手続き

我々は、2012年11月に日本、韓国、中国において、また2013年12月にはアメリカにおいてインターネットを利用して伝統的価値観調査を実施した。4か国合計1926名から回答を得たが、記入漏れの多い回答などを除き、最終的に1899名を分析対象者とした。その国別、男女別、年代別 (20代、30代、40代、50歳以上) の内訳は表2の通りである。

表2 有効回答者の内訳：比率（％）と人数

	性別		年代			
	男性	女性	20代	30代	40代	50代以上
日本 (N=454)	49.1 (223)	50.9 (231)	24.9 (113)	24.4 (111)	25.8 (117)	24.9 (113)
中国 (N=479)	51.4 (246)	48.6 (233)	24.8 (119)	23.8 (114)	25.3 (121)	26.1 (125)
韓国 (N=486)	51.2 (249)	48.8 (237)	24.7 (120)	23.9 (116)	24.1 (117)	27.4 (133)
米国 (N=480)	50.0 (240)	50.0 (240)	25.0 (120)	25.0 (120)	25.0 (120)	25.0 (120)

調査票の構成

伝統的価値尺度短縮版（JTVS-S） 伝統的価値に関する国際比較研究を行うために、JTVS の短縮版の作成を試みた。まず、日本文化に固有の価値とみなされる「もののあわれ」は短縮版から除いた。他の 12 尺度の項目に関しては、大淵・川嶋（2009a）の因子分析結果に基づき、各下位尺度において高負荷の 3 項目を短縮版項目の候補としたが、「日本」という国名が入ったものや特殊な思想を表現したものは除いた。その結果、表 3 に示した 12 下位尺度 37 項目を伝統的価値尺度短縮版（JTVS-S）とし、本研究に用いることにした。回答者には、各項目について「どれくらい賛成できるか」と聞き、「全くそう思わない (1)」、「ほとんどそう思わない (2)」、「あまりそう思わない (3)」、「ややそう思う (4)」、「かなりそう思う (5)」、「強くそう思う (6)」のうち一つを選択回答させた。

表3 日本の伝統的価値尺度短縮版（JTVS-S）

儒教的価値

忠孝と義務

- ・親を慕いこれを受する気持ちは人間のもっとも自然な気持ちである。
- ・どんな人間関係にも義務や責任があり、これを忠実に果たすことが人間にとって大切である。

- ・多少は不自由でも、みんなが規則を守り、社会の秩序を維持することが大切である。

天意・天命

- ・社会の理想的なあり方は天が定めるもので、指導者はこの天の意を汲み取って政治を行う必要がある。
- ・人の成功や失敗、幸福と不幸は、すべて天が決めたものである。
- ・自分の役目や立場は天が与えたものであり、それがどんなものであれ、天命としてこれを果たすべきである。

恥と世間

- ・何かをするときには、まず、世間からどう思われるかを第一に考えるべきである。
- ・人から非難されたり、後ろ指を指されるようなことはすべきではない。
- ・何においても、世間から孤立したり、つまはじきにされることだけは避けなければならない。

賢君思想

- ・国であれ会社であれ、指導者というものは、専門的知識や技能よりも、人間性において優れた人がその地位につくべきである。
- ・国であれ会社であれ指導者には人格と識見が必要で、規則や罰ではなく、その優れた人間性によって他の人たちを導くことが期待される。
- ・政治の指導者が自らの人間性を磨き、国の品位を高めるよう努力するなら、国民は進んで国をうやまい、これに従うであろう。

仏教的価値

輪廻と法力

- ・人は死ぬと、別の世界に生まれ変わる。
- ・この世以外にも多くの世界があり、天国や地獄もそうした他方世界の一つである。
- ・生前の行為の良し悪しによって、死後の世界での扱いが決まることを忘れてはならない。

修身と慈悲

- ・うそ、非難、中傷、悪口などは自分自身の心を汚すものだから、こうしたことはばつかりは慎むべきである。
- ・良い行いをするときには、人に知られることや相手に喜ばれることを期待せず、ただ人のために尽くすのが本当の思いやりである。
- ・良い行いを継続し、悪い行いは避けるよう心がけるべきである。

厭世主義

- ・人の人生は、苦しみや悩みに満ちている。

- ・人の一生には、欲求不満、離別、憎しみ合いなど多くの苦しみがある。
- ・病気や死だけでなく、人間にとっては、生きることも苦しみである。

空と超俗

- ・欲望がうずまく世間とのつきあいを離れ、孤独に生きることが、この世の真理を求める最善の道である。
- ・この世界の様々な愛着を断ち、心を清めることで、本当の充足が得られるであろう。
- ・この世のすべては、まぼろしのように、実体のないものである。

神道・国学的価値

社会的調和

- ・人々は、互いに自己主張を抑え、譲り合って物事を解決していくことが重要である。
- ・自分を抑えても、人間関係を大切にすべきである。
- ・理念やイデオロギーを強く主張するよりも、おおらかな気持ちで事にあたる方が、世の中は結局うまくいく。

相対主義

- ・世の中に「ただひとつの正義」「唯一の真理」といったものは存在しない。その時々によって、個別に判断をしていくのが正しい知恵である。
- ・社会の問題については、どんな時にも通用する普遍的な原理というものはない。その場その場で適切な対応を心がけることが大切である。
- ・世の中に絶対に正しいものは存在しない。状況によって適切な解決策を探っていく必要がある。

集团的功利主義

- ・物事を決めるときは、所属する集団（会社、学校、国家など）への影響を最優先に考えるべきである。
- ・人間は、常に、自分が所属する集団（会社、学校、国家など）の利害を考えて行動すべきである。
- ・人間の人生は、個人としてよりも、社会や集団（会社、学校、国家など）のために尽くしてこそ意味がある。

楽観主義

- ・世の中の動きは、人間の知恵を越えたものであり、自然の流れに任せるのが一番である。
- ・世の中のことは、人の知恵でどうにかしようとする、かえって不都合なことになるがちで、自然の流れに任せるのが一番である。

歴史の内発性

- ・社会を動かすのは個人の意志や思惑ではなく、時勢や天下の大勢といったものである。
- ・社会の動きには「いきおひ」「はずみ」といったものがあり、これがいったん動きだすと、個々人の力では止めたり変えることはできない。

集団主義・個人主義尺度（IC） 伝統的価値観以外の4カ国の価値の違いを調べるために集団主義・個人主義を測定した。この価値次元を測定する尺度はいくつか提案されてきたが、本研究では Triandis & Gelfand (1998) の尺度を用いた。これは個人主義と集団主義にそれぞれ水平的（Vertical）と垂直的（Horizontal）の下位次元を仮定するものである。水平的とは人間関係の維持や連帯を重視するかどうかを表すもので、水平的個人主義（HI）は自己が他の人たちとは独自な存在でありたいとする傾向を、水平的集団主義（HC）は、反対に他の人たちとの類似性を知覚し、仲間との強い連帯を求める傾向を表す。垂直的とは地位に関する関心の持ち方で、垂直的個人主義（VI）は他の人との競争を通して個人としての地位や達成を求める傾向、垂直的集団主義（VC）は集団の地位や威信を重視し、他の集団に対して競争的な姿勢を持つ傾向を表す。

3. 結果

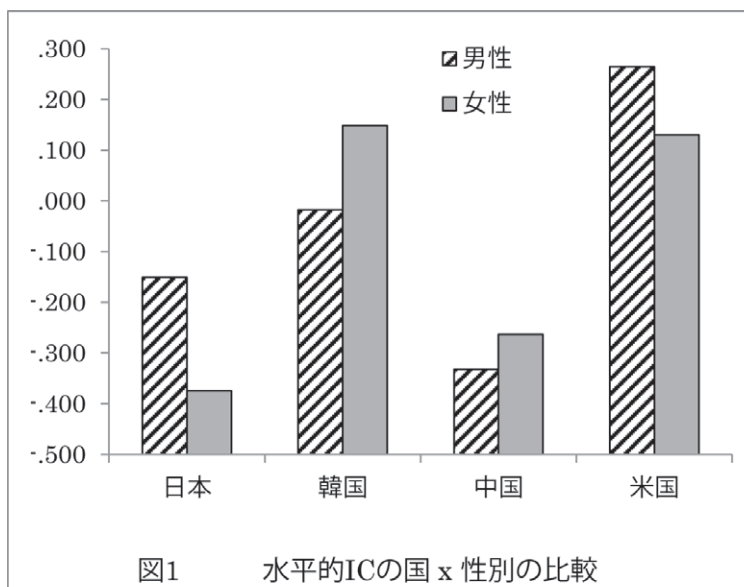
IC の国際比較

国によって反応傾向が異なるので素点を直接比較することはできない。そこで本研究では、参加者ごとに水平的個人主義得点から水平的集団主義得点を減じて、これを水平的 IC 得点とした。同様に、垂直的個人主義と垂直的集団主義の得点差を垂直的 IC 得点としたが、いずれも高得点が個人主義の強さを表す。これらをそれぞれ従属変数として国 x 性別 x 年代の分散分析を実施した。

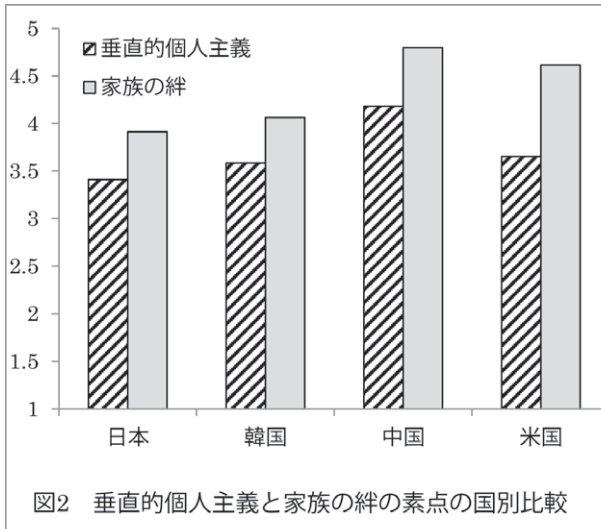
水平的 IC に関しては国の差が有意で ($F(3, 1867) = 33.802, p < .001$)、これはアメリカ人と韓国人が個人主義的で、一方、日本人と中国人が集団主義的であることを示していた。ただし、国 x 性別 ($(3, 1867) = 5.545, p < .01$) の交互作用も有意で、図 1 に示されているように、日本では男性の方が相対的に個人主義は強かったが、韓国では相対的に女性の方が強かった。この結果、アメ

リカ人は男女とも個人主義が強いが、アジア諸国で見ると、女性では韓国人が顕著に個人主義的であるのに対して、男性では日本人と韓国人が中国人よりもやや個人主義的傾向が見られた。

垂直的 IC 得点に関する分析でも国の違いが有意だったが ($F(3, 1867) = 37.387, p < .001$)、これはアジア諸国が米国よりも高得点で (日本 -.339、韓国 -.399、中国 -.520、米国 -.91)、このことはアメリカ人がアジア人よりも集団主義が強いことを示している。この結果は意外なものだったが、それは項目内容の偏りのせいである可能性がある。垂直的集団主義は「集団の地位や威信を重視し、他の集団に対して競争的な姿勢」とされているが、実際の項目を見てみると、4 項目中 3 項目は家族の絆の大切さを表すもので、集団の地位や威信を測っているようには思われない。一方、垂直的個人主義の項目は、確かに個人としての地位や達成を求める傾向を測定するものと思われる。そこで本稿では、垂直的次元の集団主義と個人主義を個別に分析を試みることにした。ただし、集団主義の項目は家族に関する 3 項目だけとしたので、その内容は家族の絆である。その国 x 性別の平均値も表 3 に示している。



国によって反応傾向の違いがあるので、素点を国同士で比較することには慎重でなければならないが、ここでは探索的に分析を行うこととした。まず、垂直的個人主義に関する国 x 性別 x 年代の分散分析では、まず、国と性別の主効果が有意だった ($F(3, 1867) = 92.306, p < .001$; $F(3, 1867) = 36.354, p < .001$)。図2に示すように、中国が最も高く、次いで米国と韓国で、日本は最も低かった。また、男性が女性よりも高得点だった ($M = 3.812, 3.604$)。年代の主効果 ($F(3, 1967) = 5.611, p < .001$) 及び国との交互作用が有意だった ($F(9, 1967) = 2.908, p < .01$) が、その意味するところは、米国においてのみ、50歳以上が他の年代よりも有意に低得点であることで、他の国では年代差は非有意だった。



家族の絆に関する分析では国の主効果 ($F(3, 1867) = 108.583, p < .001$) と年代の主効果 ($F(3, 1867) = 9.040, p < .001$) が有意だった。図2は国別の平均値だが、この得点パターンも垂直的個人主義とほぼ同じであることから、やはり国の反応傾向が強く反映されている可能性が高い。しかし、米国人は垂直的個人主義と比較して家族の絆の得点が相対的に高いように思われるので、米国人の間でこれを重視する価値観が強いことがうかがわれる。年代の効果は、

20 代の得点が他の年代よりも有意に低いことを意味していた（20 代 4.165、30 代 4.409、40 代 4.424、50 歳以上 4.393）

神道的価値観の国際比較

国によって反応傾向が異なるので素点を直接比較することはできないので、ここでは JTVS-S の項目得点を個人内で標準化し、その平均値によって下位尺度得点を作った。そのうち、本稿では神道的価値観の 5 下位尺度について国 x 性別 x 年代 x 下位尺度の MANOVA 分析を行った。まず、国及び下位尺度の主効果とそれらの交互作用が有意だった（ $F(3, 1867) = 86.426, p < .001$; $F(3.790, 7075.351) = 289.258, p < .001$; $F(11.369, 7075.351) = 23.939, p < .001$ ）。

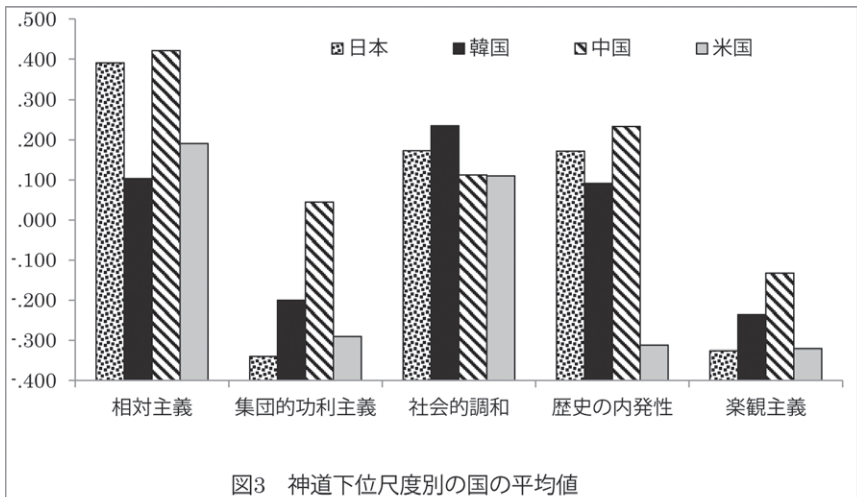


図3に示すように、全体としてみると、相対主義、社会的調和、歴史の内発性が高く、集团的功利主義と楽観主義は低かった。国の比較では、相対主義は日本と中国が高く、韓国と米国は相対的に低かった。集团的功利主義は中国が突出して高く、韓国も日本よりは高かった。日本と米国はこの価値が最も低かった。社会的調和は韓国がやや高く、中国、米国との差が有意だった。歴史の必然性はアジア3国が米国よりも顕著に高かった。中国は韓国よりも有意に

高かった。楽観主義も中国がやや高く、日本、米国との差は有意だった。

この段階での国の特徴を述べると、中国の得点が全般に高いことから、神道的価値はこれらの国の中では中国に最も強く見られたと言えよう。中国は特に集团的功利主義と楽観主義が他の国よりも顕著に高かった。日本と韓国の違いは相対主義に見られ、日本が韓国よりも高かった。米国は全体として得点は低目だが、とりわけ歴史の内発性の得点の低さは顕著だった。

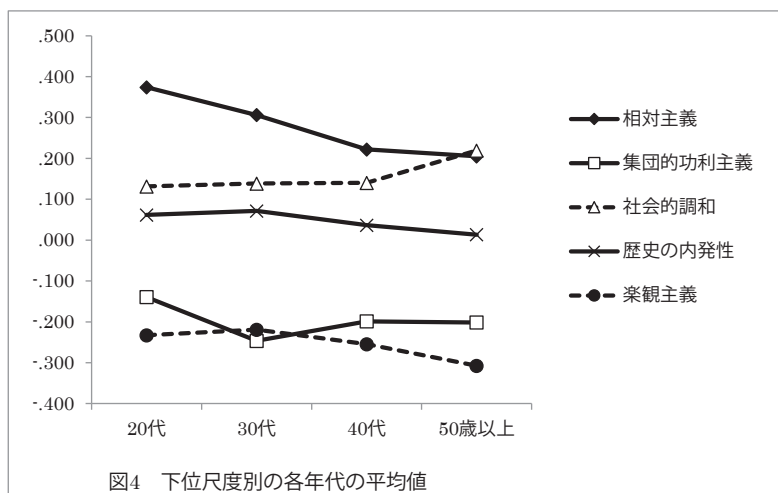
年代差に関しては、主効果 ($F(3, 1867) = 4.557, p < .01$)、年代 \times 国 ($F(9, 1867) = 2.653, < .01$)、下位尺度 \times 年代 ($F(11.369, 7075.351) = 3.175, p < .001$)、下位尺度 \times 年代 \times 国 ($F(34.107, 7075.351) = 3.437, p < .001$)、下位尺度 \times 年代 \times 性別 ($F(11.369, 7075.351) = 2.002, p < .05$) が有意だった。表 4 は下位尺度別、国別に年代の平均値を示したものである。また、図 4 は、4 カ国全体で下位尺度別に年代の比較をしたものである。4 カ国全体で見ると、相対主義と集团的功利主義は若年者が有意に高く、社会的調和では年長者の方が有意に高かった。これに対して、歴史の内発性と楽観主義の年代差は有意ではなかった。

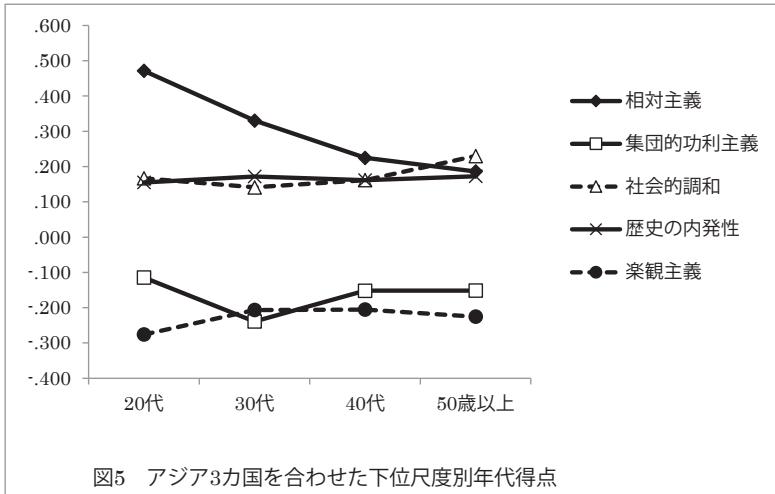
4 カ国全体での下位尺度 \times 年代の交互作用を男女に分けて見てみると、集团的功利主義が若年者に高いことと社会的調和が年長者に高いことは男性においてのみ有意で、一方、相対主義が若年者に高い点は女性においてのみ有意だった。

表 4 国別、年代別の神道的価値観下位尺度得点

神道下位尺度	国	20 代	30 代	40 代	50 歳以上
相対主義	日本	.545	.391	.377	.253
	韓国	.391	.144	-.043	-.078
	中国	.482	.458	.337	.409
	米国	.079	.231	.216	.237
集团的功利主義	日本	-.180	-.433	-.355	-.391
	韓国	-.203	-.242	-.140	-.214
	中国	.037	-.043	.038	.144
	米国	-.211	-.269	-.337	-.345
社会的調和	日本	.158	.158	.151	.221

	韓国	.227	.191	.243	.277
	中国	.107	.075	.093	.175
	米国	.033	.129	.073	.204
歴史の内発性	日本	.110	.196	.179	.200
	韓国	.169	.096	.083	.017
	中国	.181	.227	.220	.303
	米国	-.213	-.234	-.335	-.467
楽観主義	日本	-.338	-.241	-.323	-.400
	韓国	-.279	-.233	-.310	-.114
	中国	-.218	-.151	.001	-.163
	米国	-.097	-.246	-.386	-.553





下位尺度の年代差を国別に分析したところ、アジア3国では類似したパターンが見られたので、アジア3カ国を合計したものを図5に示す。この分析でもやはり下位尺度 x 年代の交互作用が有意で ($F(11.447, 5399.336) = 5.301, p < .001$)、相対主義と集团的功利主義は若年者に高く、社会的調和は逆に年長者が高かった。国別に見てもほぼ同様で、実際、日本と韓国では相対主義が若年者に有意に高く、中国では年長者の集团的功利主義が有意に高かった。

米国については単独で同様の分析を行ったところ(図6)、下位尺度 x 年代の交互作用が有意で ($F(10.922, 1732.984) = 3.952, p < .001$)、社会的調和は年長者が高く、歴史の内発性と楽観主義では逆に年長者が低かった。

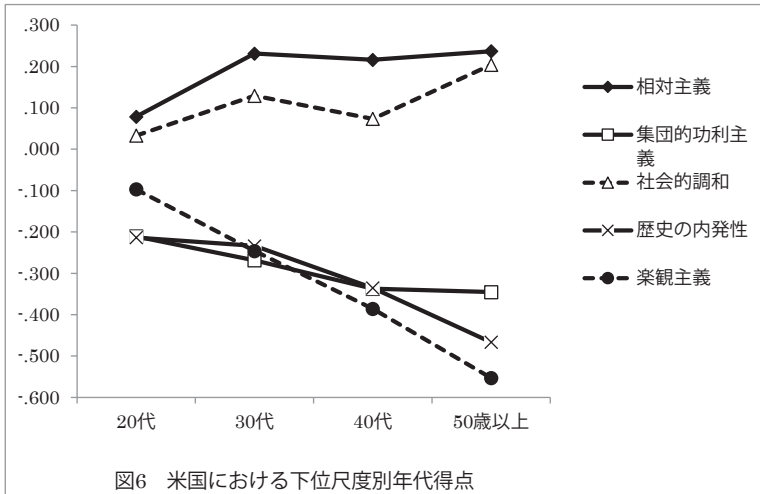


図6 米国における下位尺度別年代得点

神道的価値観と IC の相関

次に神道的価値観の下位尺度と IC の相関を国別に調べた（表 5）。上で見たように、IC 得点のうち垂直的集団主義は項目内容に偏りがあることから、これは家族の絆を表す項目の平均値を用いた。また、垂直的 IC という合成得点は使わず、垂直的個人主義は素点を用いた。また、合成得点である水平的 IC は高得点が個人主義を、低得点が集団主義を表す。

内容面から見て、個人主義・集団主義の次元をよく表すと思われるのは水平的 IC だが、この得点は、韓国、中国、米国において集団的功利主義と有意な負の相関を示した。また、日本と中国においては社会的調和と負の相関がみられた。このことは、集団的功利主義と社会的調和が集団主義的価値観を反映することを示唆しているが、これら下位尺度の内容から見ても妥当な結果と思われる。

一方、垂直的個人主義は 4 か国すべてにおいて集団的功利主義と有意な正の相関を示した。この次元は競争を通して個人的達成を求める傾向を表すものだが、本研究の結果は、個人的競争心が強い人は集団的競争心も強いことを示唆している。従来、個人主義・集団主義の考え方では、個人的事項に関心が高い人は集団的事項には関心が弱いと仮定されてきたが、ここでの結果は、個人と

しての地位志向が強い人は自分が所属する集団の地位向上にも強い意欲を持っていることを示唆するもので、競争心や達成意欲が個人と集団に共通するという知見は興味深いものだし、人間の心理としてむしろ自然のものであるようにも思われる。

表5 神道的価値観下位尺度とIC得点の相関

国	IC 得点	相対主義	集団的 功利主義	社会的 調和	歴史の 内発性	楽観主義
日本	水平的 IC	-.036	-.031	-.110*	.150*	.107*
	垂直的個人主義	-.002	.103*	-.035	.009	-.090
	家族の絆	-.124**	-.011	.060	-.021	-.125*
韓国	水平的 IC	.057	-.208**	-.062	.072	.019
	垂直的個人主義	-.229**	.125**	.029	-.140**	-.056
	家族の絆	-.199**	.101*	.052	-.138**	-.053
中国	水平的 IC	.014	-.180**	-.178**	.005	.113*
	垂直的個人主義	-.012	.135**	.025	-.009	.001
	家族の絆	-.072	.092*	.123**	-.056	.043
米国	水平的 IC	.255**	-.208**	-.027	.002	.051
	垂直的個人主義	-.096*	.133**	-.113*	.105*	.186**
	家族の絆	-.155**	-.049	-.009	-.171**	-.082

** p < .01; * p < .05

いくつかの国において相対主義は垂直的個人主義や家族の絆と負の相関がみられた。相対主義は絶対的原理を認めず、融通無碍な対処を進める处世術だが、「競争は自然の原理」と信じる垂直的個人主義や「何をおいても家族が大切」という家族の絆主義の人たちは、相対主義とは相いれない絶対的価値の信奉者であると言えよう。関連しそうな特徴として、家族の絆が2か国において歴史の内発性と有意な負の相関を示している。歴史の内発性は世の中を動かす超個人的な力を認め、人間の力の限界を認識するものでもある。論理的には説明が難しいが、家族の絆を重視する人たちは、こうした世の中に対する受動的な姿勢を拒否する人たちでもあると言えよう。

ほかに目立ったところとしては、水平的 IC が 2 か国において楽観主義と有意な正の相関を示したことが挙げられるが、相関が低いこともあり、無理な説明は控えるべきであろう。

4. 考察

神道的価値観の国際比較

神道的価値観を測定する JTVS-S 尺度を東アジア 3 か国と米国の一般市民に施行し、5 個の下位尺度に関してそれらの国の人々の間で比較を試みた。ただし、国によって反応傾向が異なるので、JTVS-S の全項目を使って個人内で標準得点化したものを分析に用いた。

4 か国を通してみると、下位尺度の中で相対主義、社会的調和、歴史の内発性が高く、集团的功利主義と楽観主義は低かった。国の比較では、相対主義は日本と中国が高く、韓国と米国は相対的に低かった。集团的功利主義は中国が突出して高く、韓国も日本よりは高かった。日本と米国はこの価値が最も低かった。社会的調和は韓国がやや高く、中国、米国との差が有意だった。歴史の必然性はアジア 3 国が米国よりも顕著に高かった。中国は韓国よりも有意に高かった。楽観主義も中国がやや高く、日本、米国との差は有意だった。米国はどの下位尺度に関しても低得点だった。

この尺度は日本における神道・国学思想をもとに作成した emic な尺度で、日本の土着的価値観を測るものであったが、国際比較研究で使用してみると、これによって測られている価値観は決して日本人に特異的なものというわけではなかった。むしろ、類似の価値観は他の国々、少なくとも東アジアの国々には共通してみられる価値観であることが判明した。そして、集团的功利主義と楽観主義などは日本よりも中国の方が高かったのである。

このことは、日本で神道的価値観とされたものと実質的には同じ内容の価値観が他国にも存在するということで、emic なアプローチから構成した価値観であったが（大淵ほか、2008）、それは etic な研究にも耐えうる普遍的価値次元に対応するものであったことを意味している。日本では神道的価値は伝統的価値のひとつとされているが、他の国々においても同様の位置づけになるかどうかは目下のところ不明である。しかし、神道的価値観のいくつかが集団主義

の価値次元と関連していることからすると、ルーツはそれぞれであっても、近代的というよりは伝統的文化の中で醸造されてきた価値観ではないかと推測される。今後は、各国の emic な価値観との対応関係を調べ、神道の価値観類の価値観が他の国々においてどのような伝統的ルーツから生まれたものであるかを検討してみたい。

そうした超文化的価値観のひとつは相対主義であった。唯一神を奉じるキリスト教やイスラム教の文化圏と違い、典型的な多神教社会である日本では、絶対的原理ですべてを断じるのではなく、状況に応じて柔軟に対処することが賢い問題解決法であるとみなされてきた（大淵ほか、2008）。しかし、図3の結果を見ると、他の国の人々の間でも相対主義は強い。東アジア諸国に広く影響を与えてきた仏教は一神教ではないから相対主義が強いと言えるかもしれないが、キリスト教国である米国の人々でも相対主義は決して低いわけではなかった。特定宗教や政治思想の強い国では別かもしれないが、本研究の対象となった近代化の進んだ国々では、絶対的原理は総じて影をひそめ、変化の激しい現代社会に対して柔軟に対処する必要があるという考え方が優勢なのではないかと思われる。我々は相対主義を伝統的価値観のひとつとみなしてきたが、意外にこれは近代化された人々の価値観を表すものであったかもしれない。

一般的に支持の高かった社会的調和は集団主義の代表的特徴とされてきた価値観であったが（Leung, Koch, & Lu, 2002）、本研究で見る限り、米国人も決して低いわけではなかった。集団主義とは言え、この価値観は集団というよりは人間関係を重視する態度を表している。心理学的用語では社会的受容を強調するものである。欧米の心理学でも、近年は受容や調和などを重視する社会志向性が人間の行動に強い影響を与えていることが認められるようになってきた（浦、2009）。社会的受容は人間の基本的欲求であり、その意味で普遍性を持つものであることから、社会的調和の価値観は程度の差はあれ、多様な文化圏に認められるものではないかと思われる。

東西文化の違いをもっとも端的に示した価値観が歴史の内発性であった。図3に見られるように、東アジア諸国は総じて支持が高いのに、米国では極端に低かったのである。これは、社会の動きは時勢や時代というものによって決定され、人間の力の及ぶものではないといった超人為性を認める社会観・世界観である。これは日本の伝統的価値観としては、丸山真男の古層論（1998）に基づいて構築した概念で、世の中を生き物とみなし、自己もその一部であり、

我々はそれに身を任せて生きるしかないという受動的態度である（大淵ほか，2008）。しかし、本研究は、こうした態度が日本だけでなく、東アジア諸国に共有されていることを示している。我々は神道、国学思想、そして丸山真男の日本文化論しか念頭になかったが、こうした世界観のルーツをもっと広範に探索する必要がある。たぶんそこにはそれぞれの国や民族の歴史、政治社会体制とイデオロギーなど様々な要因が関与していると思われるが、今回の研究で見られたもっとも興味深い知見であることから、東アジアの価値観研究の一つの方向性を示すものと言えよう。

全般的に高いとは言えないが、対象4か国間で最も差異がみられたのは集団的功利主義であった。これは集団主義の一面とされてきたが、今回の調査では、中国が突出して高く、日本や韓国など他の東アジア諸国ではそれほど高くはなかった。この結果は、同じ集団主義文化圏でも詳細に検討するなら国や民族間に差異がみられることを示唆している。非常に低得点だった日本では、会社主義だった高度成長の頃はともかく、現在では市民感覚としても個人の集団帰属や集団献身の気持ちは薄れているように思われる。中国人の高い支持が日本の高度成長期に見られた会社志向なのか、それとも、急成長を遂げ、国際社会での地位を高めつつある国威発揚を反映したものなのか、それは今回の資料からは断定できない。いずれ、日本の例を振り返ると、こうした集団主義的価値もまた不変のものではなく、社会環境の変化に伴って変動しうるものであることがうかがわれる。

IC と神道的価値観

我々が用いた IC 尺度は Triandis & Gelfand (1998) のもので、水平と垂直 2 次元で IC を測定するものである。集団主義・個人主義の文化次元の妥当性に関しては賛否両論あるが (Ohbuchi, 2011)、一般には、我々が本研究の対象国とした 4 か国のうち東アジア 3 か国は集団主義文化圏、米国は個人主義文化圏にあるとされている。水平的 IC 得点は男女とも米国の得点が高かったことから、他の研究結果と一致していると言えよう。この結果から言えることは、米国人は自分が他の人たちとは異なる独自の存在でありたいという個性化の価値観を強く持ち、一方、東アジアの人々は、他の人たちとの類似性を尊重し、仲間との連帯に価値を置く人たちである。東アジアの中でも差異はあり、韓国人がこの次元において最も個人主義が強く、中国人が最も弱かった。日本人はその中間であった。

一方、垂直的 IC 得点は、特に集団主義に関する項目が家族に偏っていたことから、一つの次元に合成することはせず、垂直的個人主義と家族の絆に分離して分析を行った。結果として素点での国別比較となり、その分析の信頼性は弱い、その結果からうかがわれることは、個人主義文化圏にある米国において家族の絆に対する価値が高いことであった。

これら IC 次元と最も強い関係を示したのは集団的功利主義であった。この価値観が水平的 IC と負の相関を示したことは、これが集団主義的文化を反映するものであることを示している。しかし、この価値観は垂直的個人主義とはむしろ正の相関を示した。垂直的個人主義は個人的達成と地位を目指す競争心を表すものだが、本研究の結果は、競争心は自分が所属する集団の達成と地位にも向けられるもので、個人・集団の両水準に共通するものであることを示唆している。

引用文献

藤原正彦 (2005). 国家の品格. 新潮社.

猪口孝・田中明彦・園田茂人・ティムール・ダダバエフ (2007). アジア・バロメーター：躍動するアジアの価値観、アジア世論調査 (2004) の分析と資料. 明石書店.

Leung, K., Koch, P. T., & Lu, L. (2002). A dualistic model of harmony and its implications for conflict management in Asia. *Asia Pacific Journal of Management*,

19, 201-220.

Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.

Ohbuchi, K. (2011). Social class and values in Japan. In K. Ohbuchi & N. Asai (Eds.), *Inequality, discrimination and conflict in Japan: Ways to social justice and cooperation* (pp. 22-40). Balwyn North, Australia: Trans Pacific Press.

大淵憲一・川嶋伸佳 (2009a). 日本の伝統的価値尺度の作成：仏教、儒教、神道・国学思想に基づいて. *文化*, 73 (1, 2), 110-140.

大淵憲一・川嶋伸佳 (2009b). 現代日本人における仏教、儒教、神道・国学思想の受容：社会調査による分析. *文化*, 72 (3, 4), 101-122.

大淵憲一・川嶋伸佳 (2010). 現代日本人による伝統的価値の受容：社会的属性との関連. *文化*, 73 (3, 4), 21-46.

大淵憲一・佐藤弘夫・三浦秀一 (2008). 現代日本人の価値観と伝統的思想：仏教、儒教、神道・国学の思想内容と調査項目の作成. *東北大学文学研究科研究年報*, 58, 154-180.

佐藤弘夫 (2005). *概説日本思想史*. ミネルヴァ書房.

Triandis, H. C. & Gelfand, M. J. (1998). Converging measurement of horizontal and vertical individualism and collectivism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 118-128.

浦光博 (2009). *排斥と受容の行動科学：社会と心が作り出す孤立*. サイエンス社.

山口勸 (2003). *社会心理学：アジアからのアプローチ*. 東京大学出版会.

A Cross-National Study of Traditional Values: Shinto Values and Individualism-Collectivism

Ken-ichi Ohbuchi

We made a short version of the Japanese Traditional Value Scale (JTVS-S) that we developed by an emic social psychological approach to the Japanese culture, focusing on three traditional thoughts of Confucianism, Buddhism, and Shinto. In the present study, among others, we attempted to examine whether the Shinto values are commonly seen in other countries than Japan. We administered JTVS-S, as well as Triandis and Gelfand (1998)'s IC scale, to people from three East Asian countries (Japan, Korea, and China) and USA by online survey, and we obtained 1899 respondents who were sampled almost equally across gender and age (twenties, thirties, forties, and older than 50). The results showed that, in average, circumstantialism, social harmony, and historical spontaneity were high, while group unity and optimism were low; the East Asian countries, especially China, were generally higher than USA, with a largest difference on historical spontaneity. This means that some values similar to Shinto exist in other countries than Japan, though they apparently have different cultural roots. From the finding that the three Shinto values were highly supported, we conjectured that people of the modernized countries prefer flexible circumstantialistic judgments to the application of absolute principles to cope with rapid changes in contemporary world; Social harmony involves a concern about interpersonal relationships rather than to group coherence, reflecting a human fundamental need for acceptance; and the large differences in historical spontaneity between the East Asian countries and USA are caused by their unique national histories. The horizontal IC scale had correlations with Shinto values in the expected patterns, while the vertical IC scale showed more complicated relationships with the values, partly because of its biased item contents.